

## 報 告

# ゼミナールにおける環境論点と 教科「情報」の視点

## A Study on the Environmental Problems by the WWW for the Learning Method

藤 本 孝一郎\*  
FUJIMOTO, Ko-ichiro

**概要：**女子短期大学のゼミナールの授業運営に、普通教科「情報」の継続した発展的内容として、環境問題を取りあげた。環境問題を論点としたプレゼンテーションソフトウェアによる発表に、Web上のグループウェアを採り入れ、グループ学習の新たな試みを実践した。

**【キーワード】** 演習授業、コラボレーション、環境学習、情報教育

### はじめに

城西大学女子短期大学のゼミナールで、プレゼンテーション学習に環境論点を導入した発表授業を考案した。さらにWeb上のグループウェアを活用して学習進度内容を共有し、授業理解を深める方法を探った。なおシステムは城西大学におけるパーソナル・コンピュータ・システム(Windows 2000)を用いた。Web接続可能な、TCP/IPプロトコルによるLAN小教室で10数人のゼミナール授業を対象とした。

## 1. 演習授業と環境論点

### 1.1 教科「情報」と環境論点

今後の大学入学者は、高等学校での教科「情報」の導入に伴い、基本的な情報リテラシー教育を経ていることとなる。これに対応して、情報教育のあり方や新たな授業内容の開発が求められている。大学におけるリテラシー教育でも新しい内容が要求されている。この点、積極的な情報技術活用能力を内容とした発表授業は、発表時の動機づけなど、効果が期待できる。

また大学入学段階で、「総合的学習」等での環境問題に取り組んだ学生も多くなるものと予想される。環境論点を導入することで、学習への興味が期待できると思う。

---

\* 城西大学女子短期大学部

## 1.2 プレゼンテーションと演習授業

ゼミナールでの発表を中心とした演習授業の実施は、教授者にとって種々の工夫の発揮できる場面である。また情報リテラシー教育を含んだ作業を内容とする場合は、進捗運営に十分な配慮が必要である。しかしパソコン等情報機器を利用したプレゼンテーションを小グループごとに作成・発表する授業には、いくつかの困難がある。さらに授業補助者のない環境では指導に困難さが伴う。そこでグループウェア技術を利用し、WWW（World Wide Web）を通じた情報リテラシー学習と授業運営の効果に着目した。

## 2. 環境の論点とグループウェアを活用した学習支援方法

### 2.1 目的と方法

演習授業での環境論点の調査・発表による学習とともに、WWW 環境の基礎知識やプレゼンテーションソフト技術の理解などを中心に情報リテラシーの学習を支援する授業運営を目的とした。そのために Web 上のグループウェア（Groupware）サービスサイトを利用した。受講者はプレゼンテーションソフトの基本操作の理解とともに資料収集を行う。結果は Web 上にファイルとして保存する。さらに WWW 経由での教授者の確認を経て、プレゼンテーション演習を行う。その後、発表内容についてクラス全体の質疑検討を通じ、検討結果を各自にフィードバックし、レポートとして提出する。なお、プレゼンテーションソフトは Microsoft Power Point によった。

### 2.2 施 設

TCP/IP プロトコルで LAN 接続された小教室（パソコン 40 台）で、Web 上のサイト提供ホームページと接合できる環境で、サーバを必要としないシステムを利用した。グループウェアサービスサイトは最も一般的な Yahoo サイトの一部機能を適宜利用した。また Web 上にグループフォルダを作成し、続いて作業領域、データ交換領域を形成した。

### 2.3 準 備

ゼミナール授業は前期・後期 2 期に分け、後期を発表期間とした。前期は教授者は、あらかじめ Web 上にグループホームを準備しておく。メンバーリストに担当者アドレス番号と名前を登録する。ログを採取・保存する。情報技術の上級者には別途興味あるテーマを討議させた。

Web 各自の学習補完のため、関係論点の講義につづき、グループ作業テーマ決定等の概略を示し、復習学習と協同作業を通じた論点理解を目的とした。

### 3. 運 用

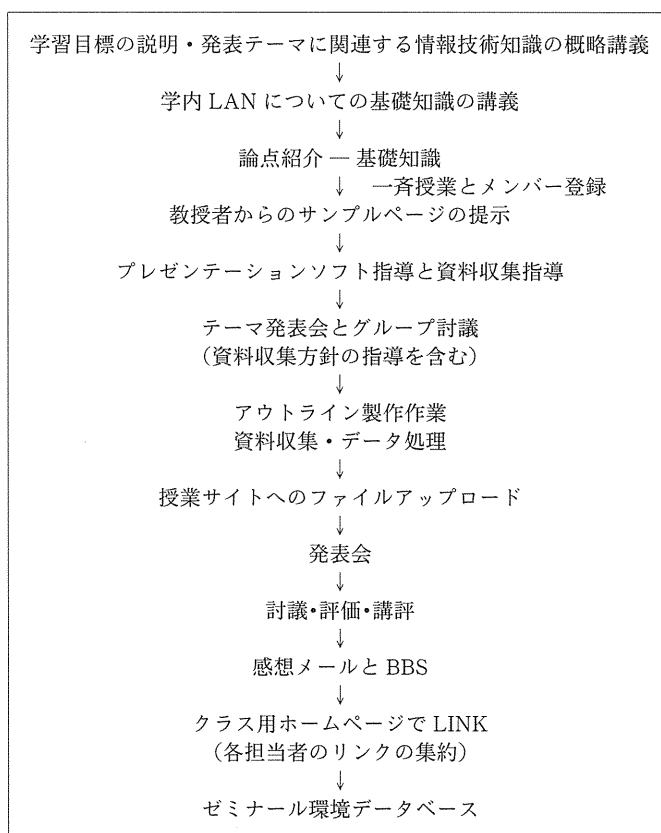
#### 3.1 準 備

授業全体を次のような過程で構成した。週1日1時限で、授業外での作業に多くの時間をとられない内容とした。グループホームのカレンダーおよび電子掲示板によって各授業期間で一定の目標設定を行い運用した。前期はメールシステムとプレゼンテーションソフトの操作を中心に指導し、情報リテラシ段階での、操作に関する抵抗感をできるだけ払拭することを旨とした。後期は発表・質疑・検討という進度をとった。

#### 3.2 教授者と受講者

はじめにグループホームサイトを形成し、サイトのメンバーリストを作成する。学生自身のメール送受信によりデータ化した。次に、授業方針・学習論点を提示し、このとき専門用語等をテキストでの確認も行う。各学生は Web を利用し、興味のある環境論点ホームページを抽出し、ホーム

図1 授業概観



サイトに保存する。履修者はフォームを電子メールで、教授者へ送信する。処理結果をブラウザ、プロジェクター等の表示によって、クラス全体で確認し質疑を行う形式とした。

### 3.3 中間発表会と進度調整

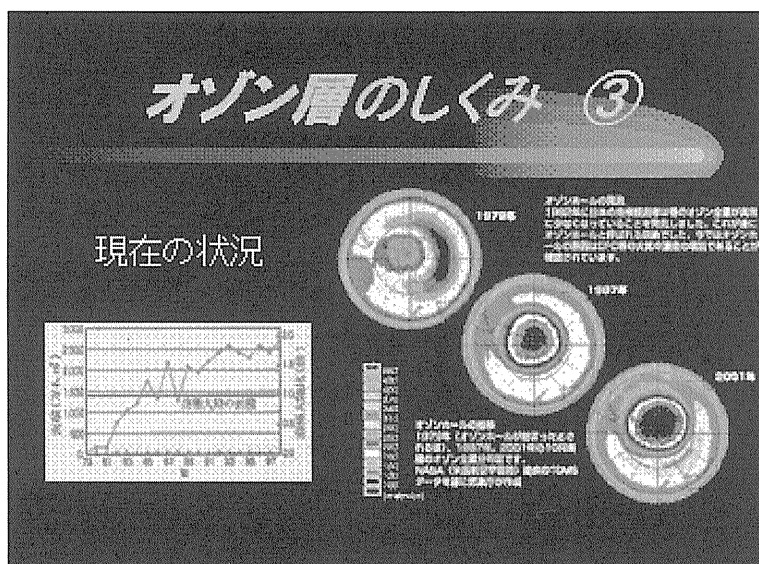
一応の進行を経た段階でのテーマ発表会として中間評価を実施し、各人作業進行のばらつきを調整した。

## 4. 結果と検討

今回の履修学生の操作水準には、大きなばらつきがみられず指導しやすかった。進行過程をWEB上で確認でき、授業へのフィードバックが可能になった。

- ・テーマを環境問題に絞ったことで、問題とらえかた等相互の情報交換がしやすかった。
- ・教授者からは、各連絡が容易となった反面、下準備（メール確認、ページ更新や、指示登録など）に手間がかかった。また日常的に運用チェックなど手間がかかった。
- ・作業進度や出欠状況がことなる学生もあり、途中で調整のための時間を設ける必要があった。
- ・なお作業の進行の遅い者、授業外での作業を厭う者には、別途目標を具体化し掲示板やメールによる督促を行った。（3名程度）
- ・ジャンクメールなどセキュリティに若干の不安があった。
- ・無料サービスの条件である、広告データに配慮が必要であった。

図2 学生作品（スライドの一部）



(Received Jan. 31, 2004)